寄稿

湘南ラグビー想い出すままに

三二回　近藤 節夫

ラグビーに関わってからかれこれ七〇年近くになる。当初は、それほど熱い気持ちでラグビーに取り組んだわけではなかったが、時の流れとともに、次第につかず離れず、気がついたらラグビーとは離れられなくなっていた。力強く迫力溢れるスポーツ本来の魅力と面白さもさることながら、ラグビーが人を引き寄せる不思議な魔力に引き込まれてしまったのである。同時に、ラグビーが他のスポーツとは一種異なる潜在的な魅力に、すっかり憑りつかれてしまったからでもある。

ラグビーファンなら誰とでもすぐ友だちになれる。そんな夢のような幻想が、二〇一九年のワールドカップで日本全国に広がり現実となった。ラグビーは誰でもが「ワンチーム」になれる。そんなラグビーにのめり込んだ高校時代から、SRCがそれなりの体制を整えた今日まで長年に亘る思いをつれづれなるままに綴ってみた。

一、初めてラグビーに触れる。

初めてラグビーに触れたのは、一九五四（昭和二九）年四月湘南高校へ入学して体育の最初の授業で、当時ラグビー部顧問をされていた仲宗根仁正先生から、いきなり「近藤！ お前身体が頑丈そうだからラグビー部に入らないか？」と勧められ、ラグビー部新入部員第一号となった時だった。正に運命的なお誘いであり、出会いでもあった。それまで野球一筋でラグビーはおろか、今や人気のサッカーにすらほとんど関心がなかった新入生にとっては、一大決心だった。それから今日までラグビーとのつきあいは、あっという間に七〇年近い歳月が経ってしまった。

入部した翌日早速雨の降る中を横浜・南太田の横浜国大グランドで行われた国体予選・対神奈川工高戦の応援に出かけた。当日予想を超えた激しい降雨のせいか、わが湘南は十五人のうち十二人しかメンバーが揃わなかった。レフェリーが私を指さしながら仲宗根先生に私を出さないのですか？と聞いていたが、先生が昨日入部したばかりでル

ールも知らないので無理ですと丁重に断って、湘南はメンバー三人を欠いたまま試合に臨んだ。激しい雨の中をユニフォームが泥んこになるまで戦ったが、力及ばず3―18で敗れた。ノーサイドのホイッスルと同時に、村田一夫主将以下湘南十二人衆は全員ジャージーを着たまま、一斉にグランド脇のプールに飛び込んで全身の泥を洗い流した。それでもまだ泥が拭いきれていなかった身体は、近くの銭湯で無理をお願いして裏口から入らせてもらい、一風呂浴びてすっきりした後に、近くの支那ソバ店で先生から全員温かいラーメンをご馳走になった。ラーメンという美味しい食べ物を生まれて初めて食べた日だった。

入学当初は部員も少なく、専任の指導者もいない中で、練習は部員の自主性に委ねられ、毎週月、火、木、金曜日、四日間の放課後が充てられた。当時他の運動部は対外的に華々しく活動していた。とりわけ硬式野球部には、五年前の四九年夏甲子園で全国大会初出場初優勝の偉業を成し遂げた栄光の余韻と、我々が入学した春の選抜高校野球大会に出場した精気と興奮がみなぎっていた。その当時野球部は、名門中京商高（現中京大中京高）と毎春交互に両校のグランドで定期交流戦を行っていた。三年生になった時、春の選抜大会で優勝した中京商野球部がやって来て、翌年プロ野球・中日ドラゴンズ入りした安井投手、星山一塁手、富田外野手らがバックネットに「全国優勝記念」と書かれた湘南のグランドで華麗なプレーを見せてくれた。ちょうどその頃東京六大学野球では、甲子園優勝経験者の二七回生佐々木信也選手が慶大主将として、二八回生衆樹資宏選手が四番打者、また東大では後に日本高等学校野球連盟会長を務めた二六回生脇村春夫主将らが神宮球場で華やかに活躍し、湘南の名は全国の野球ファンの間で広く知られていた。当然のようにその頃の野球部員の鼻息は荒かった。学校から支給される部活予算について各運動部が話し合う会合では、野球部の不遜な上級生マネージャーからタックルマシンって何だ？ そんなもの要らないのではないかと備品の購入にまでいちいち難くせをつけられる有様だった。

その当時はまだ誕生間もないラグビー部から有名大学の体育会ラグビー部へ入部した先輩部員はおらず、二九回生の水野勇右さんが青山学院大ラグビー部へ入部したのが最初だった。その後関東大学対抗戦で縦横無尽に活躍した四三回生慶大ラグビー部大石大介くんまで待つことに

なる。その他にもサッカー部、陸上競技部、バレー部、バスケット部などは華やかなインターハイや、国体などで堅実な成績を積み重ねていた。そんな中で伝統のない我々ラグビー部は、部員も思うように集まらず、地味で目立たず、肩身が狭かった。最終学年を前にした一月の新人戦では、水泳部から応援を得て漸くメンバーが揃い、公式試合に間に合わせているような有様だった。

ラグビー部・水泳部合同２年生チーム

最後列左から岡本、弓桁、梅津、大島、蓮池
最前列左２人目から長谷川、近藤、城田、

物質的にも恵まれていなかったあの当時は、スパイクを持っていた部員はたったのひとりだけで、他の部員は運動靴やバスケット・シューズを穿いて試合に臨んでいた。ジャージーは試合用、練習用に同じ一着しかなく、試合では十五人のジャージーが揃わないこともあった。現在のシマウマ模様のジャージーとは異なり紺一色の地味なものだった。およそ今の時代ならダサイと言われかねない田舎チームだった。それでも夏の合宿は校内にあった木造二階建ての合宿所に泊り込み、いっぱし朝から夕暮れまで猛練習に明け暮れた。時には熱心な先輩が来て厳しく指導してくれたが、普段はコーチなん

強力フォワード陣

ジャージーは不揃いで、スパイクは誰も穿いていなかった。

ていなかった。

三年間の在学中は負け試合が多かったが、今思い出しても誇らしく思うのは試合やプレーではなく、試合中の潔い試合態度とフェアプレー精神を度々褒められたことだった。その当時横浜商高（Ｙ校）ラグビー部顧問だった石原先生が、試合でしばしばレフェリーを務められたが、スクラムを組む前に、荒っぽい相手校フォワードに対して「○○高校は少し黙って！ 湘南を見習うように！」と注意したほどだった。ゲームでは勝利に貢献するような目立った華麗なプレーは少なかったが、フェアプレー精神だけはいつも褒められたものである。その当時、神奈川県高校ラグビー協会で指導的立場にあった石原先生は、毎度Ｙ校で開かれたキャプテン会議で、私が訪れるといつも「近藤くん！ こっちだよ」と入り口で優しく出迎えてくれた。その石原先生は、後年不幸にして学校からの帰途、Ｙ校正門前の道路を横切って車にはねられ一命を落とされたことを知った。石原先生には、顧問の仲宗根先生とともに随分お世話になった。

その後長い年月が経過してから、同期の大島泰毅くんの紹介で偶々茅ヶ崎市内に住まわれていた石原先生の娘さんを知ることになり、今も毎年年賀状を通して交流を続けている。

三年生になって私が重責の主将を務めることになり、最初に行ったことは、新入生に対する入部勧誘のスピーチであり、『湘高新聞』への入部ＰＲ文章を書くことだった。その中で伝統のない弱みを包み隠すかのように「伝統は受け継ぐものではなく、新たに作り出すものだ。ともに伝統を築いて行こう！」と呼びかけた。今思い出すと汗顔の至りである。そのせいであろうか、幸いにも多くの一年生が入部し、その後彼らが湘南ラグビー部飛躍と伝統への足掛かりを築いてくれた。

対外試合では明暗取り交ぜいくつか印象的で懐かしい想い出がある。練習試合で平塚高グランド内にある走り幅跳び用の砂場に足を取られ、よろめきながら走りトライして平塚農高に勝った試合と、新人戦で法政二高と終始互角の勝負をしながらノーサイド直前にゴール直下にトライを決められ、0―5で惜敗した試合である。他にも三ツ沢球技場で行われた最後の公式戦・全国大会神奈川県予選で、日大高に屈辱的な0―59のスコアで敗れた試合も悔しさとともに強く印象に残っている。また、近くの日本精工㈱

藤沢工場がラグビー部を創部して、早大ラグビー部出身社員が中心となったチームから練習試合を申し込まれ、度々母校グランドで同社ラグビー部と戦ったことも懐かしいメモリーである。

同級生部員はその後少しずつ増えて三年生時には八人となったが、悲しいことに今ではその半数が帰らぬ人となってしまった。部員の中で頼りになったのは、副将としていつも良きアドバイスをしてくれた、スクラムハーフの大島泰毅くんだった。彼のラグビーへの情熱とラグビー・センスは、チームの中でもずば抜けていた。進学した横浜国立大学工学部というラグビーにばかり没入していられない理工系学生でありながら、卒業までラグビー部活動を全うし、卒業後は名門東芝ラグビー部で活躍した。その後も年令を重ねるとともに社会人クラブチームで黄パンツ、赤パンツを身に着け活動しながら、今も茅ヶ崎ラグビースクールで幼い子どもたちを相手にラグビー漬けの日々を送り、その様子では当分の間彼に黄昏時はやって来そうもない。二人の実弟、三六回生大島泰敬くんと三八回生大島泰克くんもそれぞれ湘南と東大ラグビー部で活躍した。

その当時一年後輩の三三回生にひとり足の速い選手がいた。苅部正孝くんといい、俊足のＤＮＡであろうか、後年子息の苅部俊二・現法政大学教授が、陸上四〇〇ｍハードルでアトランタ・オリンピックへ出場し、広島のアジア大会では金メダリストとなった。

湘南ラグビー部が急速にチーム力を向上させたのは、前記のように我々の二年後に十名を超える新人部員がどっと入部してからだった。今ではいずれも彼岸へ旅立った主将の元ＳＲＣ副会長・入野耕二、慶大ラグビー部で活躍した巽秀樹、元鎌倉市長の竹内謙くんらが、チームの中心となって活躍するようになってからだっ

俊足バックス陣　仲宗根先生と諸先輩

た。巽くんの父親は、画家岡本太郎、歌手藤山一郎、作家野口富士男、そして私の義父らと慶應義塾幼稚舎時代の同級生としてお互いに終生交流のあった竹馬の友だった。

彼らが三年生となった一九五八年春、衝撃的な新聞記事が目に入った。ある大手新聞神奈川版に、「高校ラグビー関東大会に不明瞭な出場校選考」との見出しで、湘南が予選で勝ちながら選出されなかった県ラグビー協会内部の不明瞭な選考過程が大きく報道された。関東大会県予選の実績と選考基準からすれば、当然湘南が選ばれるべきであったにも拘わらず選出されなかった。その後、県協会の要請で行われた再試合でも勝った。それにも拘らず念願の関東大会初出場が叶わなかった、極めて不自然な選考だった。記事を読んで納得できなかった私は、学校へ仲宗根先生を訪ね、その経緯と事情を伺った。先生も不本意な選考を大変遺憾に思っておられたようだったが、すでに最終結論が下された後ではこれ以上手の施しようがないと匙を投げておられた。紳士のスポーツであるラグビーに、初めて理不尽な印象を抱いた事象だった。この屈辱にめげず、後輩たちはよく耐えて頑張り、翌年見事関東大会初出場の栄光を手にしたのである。

その後湘南は関東大会へしばしば出場したが、一九七六年に九度目の出場を果たしたのを最後に、以降半世紀近くに亘って長い空白期間がある。神奈川県は近年全国的にレベルが高くなりラグビー環境は厳しくなったと思うが、その壁を打ち破り、そろそろ長い休眠から脱して関東大会十回出場記念の栄誉を得て欲しいと願っている。

二、ラグビーにまつわるエピソード

ラグビー魂というべきか、はたまたラグビーの魅力というべきであろうか、一度ラグビーに憑りつかれるとまっしぐらにラグビー街道を突っ走るラガーマンは後を絶たない。因みに我が家では、それほど熱狂的ではないが、幸運にも三代に亘ってラグビー・スピリットを継承している。

二人の息子がまだ幼かったころ、関東大学ラグビーの観戦に度々彼らを秩父宮ラグビー場へ連れて行った。知らず知らずのうちに息子たちもラグビーに親しみ馴染むようになり、長男が高校、次男が中学へ入学すると同時に、自らの意思でともにラグビー部へ入部した。高校でウイングだった長男は、大学ではラグビーを止めてしまったが、中

学時代スクラムハーフだった次男は、そのまま大学までスクラムハーフ一筋に突き進んだ。中学時代に付属高校が花園に出場したのに強く刺激され、高校生になったら自分たちも絶対花園に出場しようとチームメートと固く誓い合い厳しい練習にも耐えてきた。三年生時には花園の全国大会東京都代表校最有力候補と目されながらも、東京大会準決勝で惜敗して夢は叶わなかった。

その血筋は、三代目の孫になっても何とか引き継がれている。次男の小学生の孫と小学生になったばかりの孫娘が、今横浜ラグビースクールでラグビーを楽しんでいる。小学生の二人の孫は、横浜日産スタジアムでスクールの仲間と収まった写真が、二〇一九年ラグビー・ワールドカップの広報用看板に掲出された。孫たちは今も毎日曜日になると次男とともにラグビースクールでラグビーをエンジョイしている。

どこへ行ってもかつてラグビーをプレーしたことがあるというだけで何事につけても交流関係が深まり、世界が広がっている。さらに言えば、前記野球部の佐々木信也先輩の紹介で、元日本ラグビー・フットボール協会会長の森喜朗元首相の知遇を得ることになった。そのご縁で二〇一四年には野球部の全国優勝のエピソードも採り入れた、佐々木先輩と森さんをそれぞれ主人公のひとりにしたドキュメント作品『南太平洋の剛腕投手』を上梓することができた。

ＪＲ横浜駅西口に掲出されたＲＷＣの大看板

森さんとは、一度こんな他愛ないことをお話したことがある。南太平洋諸島の周辺国から日本の大学・社会人チームに加入する選手の中には、首から肩、両腕にかけて派手な入れ墨（タトゥ）をしている選手が目につく。日本ではあまり見た目に好ましい印象を与えないので、こういう選手のいるチームは、全員が入れ墨を蓋うように長袖のジャ

ージーを着てもらうわけにはいかないでしょうかと尋ねてみた。森さんは「そうは思うが、現地ではそれが当たり前なので伝統文化を否定するようなことは難しい」と仰っていた。

幸いにも仕事やプライベートで海外へ出かける機会が多かったため、これまで出かけた旅行先でしばしば人気スポーツを観戦する機会があった。しかし、残念ながらラグビーは、季節的に日程のタイミングが合わず、本場で観戦する機会がなかった。それでもラグビーについては、海外でいつまでも忘れられない愛おしい想い出がある。

創部六五年記念誌にラグビー校訪問記を寄稿したが、ラグビー発祥のラグビー校を訪れ、ラグビー市の教育関係者に温かく迎えてもらったことが、今でも懐かしく思い出される。その時、日本側にラグビー経験のある関係者が私しかいなかったため、ラグビーの土地柄らしくラガーマンの私がリスペクトされ、パーティ席上ではまるで主賓のようにもてなされた。その時ポジションは何をやっていたのかと尋ねられてバックロー・センター、今でいうナンバー・エイトだと応えたら、ナンバー・エイトにしては身体が小柄なので、スクラムハーフかと思ったと言われたことが強く印象に残っている。

そして、二〇年ほど前にニュージーランドへ出かけた時のことである。クライスト・チャーチ国際空港待合室のテレビでラグビーの試合が放映されていた。搭乗機を待っている間に夢中になって観ていた時だった。テレビの前に立ち、じっと画面を見つめている日本人を珍しく思ったのか、ひとりのニュージーランド人が話しかけてきた。ラグビーは好きか？面白いか？　と尋ねたので頷くと、いかにラグビーが素晴らしいスポーツであるかについて熱心に話し始めた。自分たちニュージーランド人にとっては、ラグビーが国技であることに誇りを持っていると語り、日本人である私がラグビーを愛してくれることは嬉しいことだと話してくれた。いつか日本でラグビー・ワールドカップが開かれたら素晴らしいことだと話し、搭乗時間間際まで二人でラグビー談義に没入したことがある。二〇一九年成功裏に終わったワールドカップ日本大会開催を、あの時のラグビー好きニュージーランド人は、どう思ってくれているだろうか。

ラガーマンだったということだけで、内外のいかなるラガーマンともすぐに打ち解けて相手の懐に抵抗なく入っ

て行けるのは、誰にも壁を作らないラグビーの本質的な魅力ではないかと思っている。

他のスポーツにはないラグビーらしい特徴をいくつか挙げるなら、通常オリンピックをはじめ国家同士の国際対抗試合では、代表選手にはその国の国籍がないと選出されない。だが、ラグビーでは所属する国のラグビー協会が認めれば、その国の代表選手として出場することが可能である。これこそラグビーが誰をも受け入れる懐の深さである。昨年ワールドカップで日本がベスト8に入ることができたのも、他ならぬこの広量なルールの恩恵を受けたことが大きい。

更に国籍に関して言えば、特異なのはワールドカップにイギリスというひとつの国家（地域）から国の代表チームが、イングランド、スコットランド、ウェールズの三チームも出場できるということである。しかもイギリス領の北アイルランドが、イギリスとは別の国アイルランド・チームとして参加するのも異色である。それでいてイギリス国歌〈God Save the Queen〉は、イングランドの試合だけにしか演奏されない。オリンピックとは大きく異なる点である。

また、野球などと異なりイギリス生まれの伝統的なスポーツの割には、ラグビーは考え方が柔軟で世間の常識を受け入れることにあまり抵抗がない。ラグビー揺籃期から私たちがプレーしていた時代には、ルールはヤード・ポンド法に従って行われていた。それが、今ではメートル法が世界の流れになったことを受けて、ラグビーはイギリスだけに留まらず世界への「進出」に伴い、メートル法に切り替えられた。それは、実際にグランド内の25ヤード・ライン（22・86m）を若干縮小して、鷹揚にも現在の22メートル・ラインに変更・調整してフレクシブルに対応したことでも分かる。アメリカのメジャーリーグ野球が、いつまでも頑固にヤード・ポンド法に拘っているのに比べて、ラグビー界は遥かに時代に順応したシステムで先進的に歩んでいると言える。

ラグビーが、スポーツという分野ばかりではなく、広域的に多くの人びととの人脈や文化を広げたことは間違いない。ラグビーをプレーし、長く関わることができて幸運だったと思っている。

三、ラグビー部とＳＲＣに精魂傾けた岩田初代会長

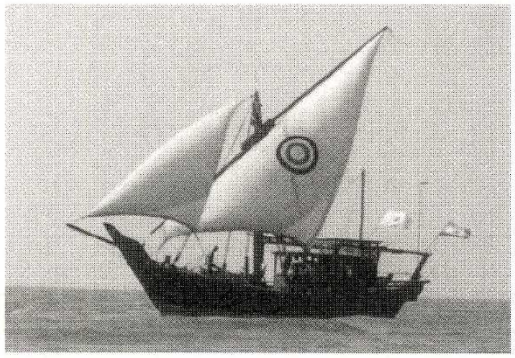
ラグビー部がまだ湘南高に存在しなかった一九五一年、同期生とともに、新たな運動部としてラグビー部の創部にその中心となって尽力されたのは、今は亡き二六回生岩田明さんだった。今日母校にラグビー部があるのは、岩田さんの湘南で仲間とともにラグビーをプレーしたいとの熱い気持ちとひたむきな努力の賜物である。

SRC 発足前最後の会議（岩田会長前列左２人目）

1963 年 12 月 於 東京全労本部会議室

ラグビー部を創部したのが岩田さんなら、ラグビーの理念を採り入れ今日後輩たちの部活動にＯＢが多少なりとも物心両面で支援できるＯＢ会組織「湘南ラグビークラブ」（ＳＲＣ）の仕組みを作り起ち上げたのも岩田初代会長だった。

一九六三年、当時岩田会長が勤めていた全日本海員組合事務局に同じ志のＯＢが度々集まっては、ＳＲＣ発足のための検討と打ち合わせを重ねていた。岩田会長の湘南ラグビー部とＯＢ会の将来を見据えたＳＲＣ設立の情熱は並々ならぬものがあった。クラブの名称も中々決まらなかった。私は母校の近くにある「烏森」（カラスモリ）に因んで「烏森クラブ」を提案した。しかし、



岩田会長が復元したシュメール船キエンギ号

外部の人には分かり難いということから、最終的に最も分かりやすく母校との関係が一目瞭然ということで「湘南ラグビークラブ（ＳＲＣ）」に落ち着いた。

ＳＲＣ会則第二章「目的」の第三項に「この会は、ラグビーをきずなとして、第二の兄弟たる事を目的とする」とのユニークな文言を採り入れたのもラグビーの仲間意識の強かった岩田会長の発想であり、ラガーマンの心情を斟酌した岩田会長らしい心配りだった。幸いにしてイワタイズムは今や湘南ラガーメンの心に深く根付いている。

岩田会長は湘南高校を卒業されると東京商船大学（現東京海洋大学）へ進み、同大卒業後三井船舶㈱（現商船三井㈱）へ入社され、一等航海士として七つの海を航海した「海の男」だった。船を降りてから長らく全日本海員組合執行役員として活動された。

その一方で、行動的でありながら学者肌の岩田会長が一途な思いを発揮されたのは、以下のような破天荒にして驚異的な行動である。「菊の御紋章」と呼ばれる天皇家の紋章「十六菊花紋」がバビロン（現イラク）の地に残っていると知り、これこそ四千年前に当時のシュメール人が日本に持ち込んだものであるとの仮説を立て、それを実証しようと画期的な試みに挑戦したのである。昔と同じ三三㌧、全長一五ｍの帆船キエンギ号を自らインドで指図設計して復元し、一九九二年三月、七人のインド人クルーとともに日本への航海を試みた。キエンギ号は出港後三か月をかけてインド洋からマラッカ海峡を通り、順調に日本近海まで近づいていた。ところが「好事魔多し」が現実となった。沖縄久米島沖で暴風雨に遭遇して船は転覆し、岩田船長以下全船員が海へ投げ出されてしまった。二六時間も海上を漂流した末に、幸い航空自衛隊機に発見され、間もなく大型ヘリによって奇跡的に全員救出された。この前時代的航海は各寄港地でも話題となり、朝日、読売など大手新聞にも大きく取り上げられた。

偶々岩田会長から、戦時下の治安不安定な国々へ危険を顧みない武者修行を続けていた行動力を見込まれたのか、ある日私は唐突に呼び出され次期会長を引き受けて欲しいと強く要請された。主たるＯＢの了解はすでに取り付けてあると外堀は早や埋められていた。こうして考える暇もなく二代目会長を引き受けることになった。

ところが、二〇〇〇年元旦湘南ラグビー祭で岩田会長から正式に会長職を引き継ぐ当日になって、突然思ってもみ

なかった衝撃的な事態が発生した。岩田会長が湘南のグランドへ降りる中央階段途中で足を踏み外し転倒、そのままグランドへ転げ落ち頭部を強打して意識を失ってしまったのである。すぐさま救急車で救急病院へ搬送された。病院のベッドで意識を取り戻した岩田会長から、私が会長職を、大石大介くんが監督を引き継ぐという前代未聞の会長・監督交代劇を演じることになった。

縁は、思いがけないきっかけと運命によって生まれるものである。岩田会長が種を蒔いた湘南ラグビー部でラグビーに触れることになり、そしてそれが延々と今日までSRCメンバーとしてつながっている。今岩田会長は冥界からグランドを見下ろして、後輩部員たちや私たちOBの活動をどう思っておられるだろうか。グランドへ足を運ぶと岩田会長の優しかった笑顔が瞼に浮かんでくる。

四、忘れられない二人の湘南ラガーメン

三年間のラグビー部活動中、ともにプレーした仲間とはラガーマンとしてその後も親しく接してきたが、その中で私にとって卒業してからもラグビーとは別に、ことさら心に残り忘れられない湘南ラガーマンがいる。その中で先輩と後輩をそれぞれ紹介したい。

① 六〇年安保闘争のリーダー・三一回生 清水丈夫さん

先輩の中で、どうしても忘れられないのが、一年先輩の三一回生でともにスクラムを組んでいた清水丈夫さんである。清水さんは六〇年日米安全保障条約改定に反対する安保闘争で、全学連（全日本学生自治会総連合の略）の書記長を務めて全国学生に対して安保反対闘争を主導していた。総資本・総労働の対決として国論を二分し日本の社会運動史上に今も残る六〇年安保闘争で、学生運動の先頭に立った東大生清水さんは、時の人でもあった。大学生になって間もなく、まず何をやるべきかを考えていた時、どこで知ったのか清水さんから同志のメッセンジャーを通して密かに私の大学キャンパス内にオルグを作れとの指令らしきメッセージを受け取り、安保闘争に積極的に関わるよう誘われた。まだ大学に入学したばかりで何をやるべきか決めかねていた私は、その時清水さんの意向に応えることなく、失礼ながらオルグの結成に関わることはなかった。しかし、その後社会思想史を学ぶとともに安保反対闘

争に参加するようになり、安保以後ベトナム反戦運動に次第にのめり込んで行ったのも、この時安保反対運動へ誘ってくれた清水先輩の影響があった。

清水さんとは、激しかった安保闘争の際万軍のリーダーとして遠くから敬意を払って眺めていただけで、実のところ高校卒業後直接会って話をしたことが一度もない。その清水さんは安保後の一時期公安当局に検挙された。拘置所収監中に同志から差し入れてもらったマルクスの「資本論」に没入したその真剣な勉学態度に、刑務官が普通の受刑者とはまるで違い、只者ではないといたく感心させられたと一部で評判になった。清水さんならさもありなむと思ったものである。自らの信念を曲げて転向して去って行った、かつての同志たちとは違い、清水さんは妥協を潔しとせず、筋金入りの武装闘争家として固い信念を抱き続け現代社会の変革を模索していた。潜伏しながらも新左翼の「革命的共産主義者同盟全国委員会議長」（略称：革共同）として密かに二一世紀中に世界革命を目指しているとの噂が漏れ伝わって来る。

六〇年安保闘争に誘われたことがきっかけとなり、私はその後安保闘争、ベトナム反戦運動に参加した。戦時中のベトナムで危機に晒されたり、六七年第三次中東戦争直後のヨルダンで軍隊に、またスエズ運河で警察に拘束されるほど過激な行動に走り、アデン（現イエメン）では一旦は入国を拒否されながらも、独立後最初に入国した日本人とまでなった。このような破天荒な行動に走ったのも清水先輩の信念と行動に少なからず影響を受けたことがあると思っている。何とかして話をしてみたいと願ってはいたが、残念ながら清水さんは一九七〇年以降社会の表舞台からまったく姿を消し、今以て直接会って話をすることができないことがもどかしい。戦前特高の追跡から逃れた「地下潜伏」という言葉がふっと浮かんで来る。清水丈夫選集第五巻を購入した時、出版した前進社と電話とメモのやり取りはできたが、それも同社の代理人を通した細いパイプだった。

そんな折も折、本稿執筆中の二〇二〇年九月十五日予期だにしないことが起きた。不意にネット「朝日デジタル」に『中核派』最高指導者の姿、半世紀ぶり確認 集会に出席」なる衝撃的な見出しが流れた。また前進社ＨＰにも「九月六日革共同政治集会 秋月書記長が基調報告、清水議長も登壇」と清水さんの突然の出現が報じられたのである。

ＨＰでは「書記長に続いて清水丈夫議長が、七０年安保・沖縄決戦下での破防法弾圧との闘い以来、半世紀ぶりに公然と集会の場に姿を現し、特別報告に立った」と感動的に報道した。すると同日付朝日夕刊にも「中核派トップ 半世紀ぶりに姿」と掲載され、その三日後の日経「春秋」欄には、官邸の公安担当官房副長官もむっ？となったと書かれたほど、清水さんの唐突な出現は驚きとともに俄かに注目された。長らく世間にその姿を見せず、一時死亡説まで流れたあのラガーマン清水さんが、元気なことを知りホッとしている。

いつの日にか清水さんと、ともに闘った六〇年安保闘争や、日米安保条約の現状、はたまた湘南ラグビー部について率直に話し合ってみたいと思っている。

② 現職市長を破った三四回生 竹内謙・元鎌倉市長

もうひとり記憶に残る忘れ難いラグビー部員のひとりに、二年後輩（三四回）で同じくフォワードだった竹内謙・元鎌倉市長がいる。

彼は、早稲田大学理工学部で土木工学を学んでいながら血筋であろうか、ジャーナリストの道を選んで朝日新聞政治部記者となった。在職中三木武夫元首相番として政治報道に携わった。早大時代は直木賞作家、西木正明・日本ペンクラブ副理事長らと同じ探検部員として海外へも出かけていた。祖父、父、兄も弁護士だったが、とりわけ祖父の金太郎は国選弁護士として、ゾルゲ事件の尾崎秀実や、阿部定事件の阿部定の刑事弁護人として活躍したことは広く知られている。

拙著出版記念会に出席されたＳＲＣ会員

右から２人目竹内元市長　2004年11月

一九九三年鎌倉市長選挙に先立ち、会って話をしたいと唐突に連絡があった。半信半疑のまま久しぶりに新橋で会った時、最初に彼の口から出た

言葉に一瞬耳を疑った。朝日新聞社を辞めて鎌倉市長選に出ようと考えているが、その際には選挙対策本部事務局長として支えて欲しいと藪から棒に懇願されたのである。だが、その当時生憎業務が多忙を極めていて、とても要望には応えられそうになかった。そこで私よりもっと相応しい人を見つけ、私は外部から支えたいと彼の申し出をやんわりと断った。そして当時失礼ながら時間的にゆとりがありそうに見えた、二九回生の水野勇右先輩に事務局長をお願いし、快く引き受けていただいた。私は毎休日になると鎌倉市内の選挙対策本部に出かけては、市内でビラ配りなどを手伝っていた。選挙事務所には、水野さんをはじめとして同期三四回生の仲間たちが毎日のようにボランティアで詰めかけては献身的に働き支えていた。竹内謙・鎌倉市長は、湘南ラグビー部OB有志のバックアップに支えられて当選したとも言える。選挙には、三木元首相夫人や、早大時代に探検部顧問だった奥島孝康・元早大総長ら著名人も応援に駆けつけてくれた。

実は、九三年初めての市長選で争った対立候補者は、何と母校湘南の先輩で甲子園球児でもあった三一回生中西功現職市長だった。図らずもラグビー部と野球部の対決となった。そのため選挙期間中鎌倉市内で野球部の友人と出くわすことも度々あった。野球部の友人からは当然恨まれるようなことになってしまった。JR鎌倉駅前の立ち合い演説会では中西市長と鉢合わせしたこともあり、野球部OBに見つからないようそっと身を隠すようなこともあった。選挙では幸運にも中西現職市長を破ることができ、竹内市長はその後再選されて二期市長を務めることになった。

自民党神奈川支部の支援を受けた中西市長の応援演説のため、鎌倉へ来られた湘南三〇回生で当時運輸大臣だった亀井善之先輩と、後年この時の市長選について話した時、亀井さんは「ラグビー部と野球部の戦いだったとはまったく知りませんでした。そうだったのですか?」と笑っておられた。

市長在職中の業績としてメディアに大きな話題を提供したのは、鎌倉市役所内の記者クラブ室の大手メディアによる独占的な使用を止め、全ての報道機関に平等に開放する「広報メディアセンター」を開設したことだった。それまで記者クラブ室は大手メディアが独占していたが、その後はケーブルテレビ、FM放送、タウン紙、専門紙も登録

できるようになった。記者クラブ改革は、日本新聞協会の記者クラブに関する見解を改正させる大きなきっかけにもなった。

市長退任後、インターネット新聞社を起ち上げたり、大学客員教授としても活動していた。拙著の出版記念会へも気軽に来てくれ、私が関係するセミナーにも出講してくれた。その後長年考え抜いた構想「鎌倉学会」の創設に力を貸して欲しいと頼まれ、心の準備をしていたが、惜しいことにその直前、二〇一四年四月慌ただしく彼岸へ旅立ってしまった。今は市長時代の力強い後援者だった湘南三回生井上禪定住職が眠る東慶寺墓地に静かに眠っている。時代にタイムリーな環境問題に精通し、精力的に活動し、後輩ではあったが尊敬できる、記憶に残る湘南ラガーマンのひとりだった。

五、湘南ラグビー部の今後に期待

二〇一九年全国各地で開かれた第九回ラグビー・ワールドカップは、周知のとおり日本代表チームが初のベスト8入りを果たし、日本中を熱狂の渦に巻き込み大成功を収めた。それまでラグビーを知らなかった人たちまでがラグビーに興味を抱いてテレビ観戦し、スコットランド戦でベスト8入りが決まった瞬間の視聴率は、実に53・7%で、同時に開催されていたプロ野球日本シリーズの平均視聴率11・8%を完全に圧倒した。チームの合言葉「ワンチーム」も、一九年の流行語年間大賞に輝いたほどの活躍と人気ぶりだった。

3年生部員送別会で仲宗根先生を囲んで 1957年1月

幸いわが湘南高校ラグビー部も初期の低迷期を脱して、今や強豪校がひしめく神奈川県でもその力を評価され、注

目される存在になった。部員諸君の努力はもちろんであるが、学校側の支援、保護者の献身的なお手伝いに応えて、ＳＲＣも物心両面でできるかぎりバックアップしていきたいと思っている。

『貧乏物語』を著した経済学者・河上肇が残した至言の中に、

「辿りつき　振り返り見れば山河を
　越えては越えて　来つるものかな」

という私の好きな言葉がある。

幾多の苦難を乗り越え、辿り来たラグビー道を振り返ると感慨無量である。今ここに母校創立百周年という慶賀すべき年に、併せて輝かしいラグビー部創部七〇周年記念行事を迎えることができることは、万感の想いであり心より嬉しく思っている。ＳＲＣ会員ともども築き上げた伝統を衷心よりお祝いし、これからも湘南ラグビー健児の意気を示して、部員諸君には文武両道で新たな歴史と伝統を築いてくれることを心より願って止まない。

輝く創部七〇周年へのお祝いのことば

三一回　武智　昭

待望のラグビーワールドカップ日本大会は、遂に二〇一九年九月二〇日から一一月二日までの一か月半、各地で熱戦が繰り広げられた。日本中がラグビーで沸き立った。ラグビーが終生のライフワークとなった私には、ラグビーをやってきてよかったと思う、本当に我が人生最高の四四日間であった。

遡ること昭和二八年、池田浩直、石田忠雄、笠尾重光、倉地孝雄、清水丈夫、神保輝夫、武智昭、葉山水樹、肥后正明、山田信吉、山本恒夫、渡辺誠、和田正温等の一年生は、部員募集で我ら一年生の教室に現れたラグビー部村田一夫先輩の熱烈苛烈な勧誘に次々一本釣りされて、新しく出来たばかりの部室に連れて行かれた。多くは一七組で私もその一人であったが、それぞれ皆は実のところ不安で入部を躊躇していた。しかし当時ラグビー部々長教諭であられた恩師仲宗根仁正先生が、他のスポーツにはないラグビーのすばらしさや特徴をつぶさに、滾々と懇切丁寧に話さ